

6

股関節脱臼その他 (整形外科)

「赤ちゃんの股関節が脱臼する?」「痛くないの?」

そう思われる保護者が多いかもしれません。股関節は足の付け根の関節で、大腿骨頭が骨盤の深い受け皿（臼蓋）の中で回るよう動く球関節です。赤ちゃんの股関節は大人と異なり臼蓋が非常に浅いため、場合によっては脱臼してしまうことがあります。脱臼していても痛みを伴わないため気づかれにくく、日本では主に3～4か月健診で診断を受けることが多い疾患です。脱臼が認められた場合には装具療法、牽引療法、手術療法などの専門的な治療によって可及的早く整復する必要があります。また脱臼を認めなくとも、股関節の発育が遅れたまま成長してしまうと、思春期頃より股関節の軟骨がすり減り、早期に変形性股関節症となって痛みのために日常生活や社会生活に制限が生じてしまいます。

赤ちゃんの股関節の良好な発育を促し、脱臼を予防するにはどうしたらよいか。多くの研究の結果、“股関節を大きく開き、自由に動く状態に維持すること”が重要であることが判明し、日本小児整形外科学会は以下の育児法を推奨しています。

① コアラ抱っこ

膝を曲げて足を大きく開いた状態で縦抱きを行いましょう。コアラが木にしがみつく姿勢に似ていることから“コアラ抱っこ”と言われます。はじめは開きにくい赤ちゃんもコアラ抱っこを継続することで徐々に開き、抱っこしやすくなります。よ

り早期から縦抱き抱っこを行うことの重要性が国際的にも浸透してきており、最近では首すわり前から装着できる抱っこ紐も増えてきました。一方横抱きが習慣づいてしまうと、股関節の発育は遅れ、脱臼のリスクが高まります。

② 向き癖をつくらない

向き癖とは仰向けにしたときに赤ちゃんがいつも同じ方向を向いてしまう状態のことです。向き癖があると向いている反対側の股関節が閉じてしまい、発育に遅れが生じてしまいます。向き癖をつくらないコツとしては、赤ちゃんに対してお母さんの寝る位置を左右交互に切り替える、ドーナツ枕などを利用して左右を向きやすい状態にするなどが考えられます。また強い向き癖がある場合には、筋性斜頸という別の病気が関連していることがあります。

③ 足の動きを妨げない衣服

足の動きを妨げないためには、おくるみで足を窮屈にしない、小さすぎるおむつや衣服、硬いズボンを履かせないなどが考えられます。

残念ながら熊本県内ではまだこれらの育児法が十分に浸透していない現状があり、育児法が影響したと思われる股関節脱臼の赤ちゃんが未だに発生しています。股関節脱臼ゼロを目指して、是非取り組んでいきましょう。

股関節に限らず、お子さんの運動器の異常についてのご相談には、お近くの小児整形外科を受診してみて下さい。お子さんの健やかな成長を願っております。

林田 洋一